

アムスメロンの接木台木の比較

上村 隆策・加賀屋 博行・藤本 順治・畠山 順三

(秋田県農業試験場)

Comparison of Grafting Rootstocks on Melon Cultivar "Amusu"

Ryūsaku UEMURA, Hiroyuki KAGAYA, Junji FUJIMOTO

and Junzō HATAKEYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

秋田県のアムスメロンの栽培は、昭和52年から水田再編に伴って、積極的に導入され、昭和54年の作付面積が45ha、同55年は97haと倍増した。昭和58年には280haに達し、プリンスメロンに代って県内の露地メロンの50%程度を占めるに至り、県の重点推進品目に上げられている。作型は4月下旬から5月にかけて定植する露地の大型トンネル、マルチ栽培が主体であり、早出しをねらったベトコンハウスやパイプハウスでの栽培もみられる。出荷は7月下旬から始まるが、8月に集中し、一時的に供給過剰となって価格の低迷をまねくことがあり、作期の拡大を図ることが望まれている。また、作付年数の経過に伴い連作障害も問題化しつつある。これらの技術対応のひとつとして、接木について昭和58年、同59年に台木の比較を検討したので報告する。

2 試験方法

(1) 昭和58年度

- 1) 供試台木 健脚 園研2号 No.8
- 2) 接木方法 割り呼び接木
- 3) 耕種概要
 - a. は種期 穂木、共台 3月15日
カボチャ台 3月18日
 - b. 定植期 4月25日
 - c. 栽植距離 畦間300cm 株間80cm
 - d. トンネル様式 トンネル幅200cm 高さ60cm
0.07mmポリフィルム被覆
 - e. 施肥量(kg/10a) 基肥 各成分とも10追肥なし

- f. 整枝方法 子づる2本仕立 1つ着果目標2個、1方向誘引

(2) 昭和59年度

- 1) 供試台木 園研2号、新土佐1号、金剛
- 2) 接木方法 割り呼び接木
- 3) 耕種概要
 - a. は種期 穂木、台木 3月27日
カボチャ台木 3月31日
 - b. 定植期 5月2日
 - c. 施肥量(kg/10a) 基肥 各成分とも7と5の
二水準、追肥 なし
 - d. 栽植距離 トンネル様式、整枝方法は昭和58年度と同じくした。

3 試験結果

(1) 昭和58年度の結果

供試台木として、共台の健脚と園研2号、これにカボチャ台のNo.8を用い、アムスの自根を対照に比較した。初期生育は健脚がつるの伸びがよく、最も旺盛で、次いで園研2号であり、No.8は自根よりも劣っていた。後期の草勢は園研2号がよく、次いで健脚、No.8の順であり、自根はやや草勢の衰えがみられた。開花は、いずれの接木とも自根よりも早く、健脚が最も早かった。初期の収量は園研2号が最も高く、次いでNo.8であった。全期間を通じた収量では、自根にくらべ、園研2号が30%増で高く、健脚とNo.8は着果が劣り、低収であった。果形やネットの発現ではほとんど差はみられなかったが、糖度では、No.8と健脚が低く、園研2号は自根とほぼ同じであった。

表1 生育調査(昭和58年度)

	5月20日（定植後26日）				開花始期 （11節）	8月29日（収穫後期）			
	つる長 (cm)	葉 数 (枚)	最 大 葉 (cm)			つる長 (cm)	最 大 葉 (cm)		草 勢
			タ テ	ヨ コ			タ テ	ヨ コ	
健 脚	81.3	11.5	13.1	17.5	5月28日	223	21.5	27.0	中
園研 2 号	77.8	10.8	12.9	17.5	5月30日	253	21.5	28.5	強
No. 8	61.5	9.5	8.8	14.5	5月31日	224	17.3	22.5	中
(対) 自 根	74.3	11.0	12.0	15.8	6月 2日	231	19.5	24.0	弱

表2 収量 (kg, 個/10a): 品質調査 (昭和58年度)

		前期 (7/23~8/4)			中期 (8/5~8/17)			後期 (8/18~)			合 計			品 質 調 査			
		個数 (個)	重量 (kg)	一果重 (g)	個数	重量	一果重	個数	重量	一果重	個数	重量	一果重	果高 (cm)	果径 (cm)	果径 果高	糖度 (Brix)
(対) 健脚 園研2号 No. 8 自 根	健脚	348	484	1,260	448	544	1,214	448	554	1,237	1,280	1,582	1,236	14.2	12.9	0.91	12.6
	園研2号	961	1,173	1,221	593	580	978	593	669	1,128	2,147	2,422	1,136	14.5	12.3	0.85	13.1
	No. 8	896	965	1,077	160	178	1,119	0	0	—	1,056	1,144	1,083	14.0	12.1	0.86	12.2
	自 根	672	880	1,310	448	491	1,096	384	470	1,224	1,504	1,841	1,224	14.5	13.1	0.90	13.8

(2) 昭和59年度の結果

供試台木に園研2号とカボチャ台木の新土佐1号と金剛を用い、施肥窒素量を10a当たり成分7kgと5kgの2水準に設定し、台木と施肥量の関係も検討した。

初期の生育は新土佐1号と金剛が自根と園研2号よりも旺盛であった。しかし金剛では苗の生育むらが大きく、定植後、葉の黄化し枯死する株もみられ、アムスメロンとの親和性に欠けるようであった。また新土佐1号は7月中～下旬の収穫直前につる枯れ病が多発し、収穫に至らず枯死する株があった。

施肥窒素量と生育の関係では、7kgが5kgよりつるの伸びが良く、園研2号と自根でその差が大きく出ている。カボチャ台では少なく、台木による吸肥力の差がみられた。窒素7kgを施用した収量では、園研2号が自根よりも収穫果数、一果重とも大きく、10%増であった。新土佐1号と金剛は自根よりも低収であり、一果重が2kg以上のものが多く、メロンとしては過大であり、果形もカボチャ状とな

表3 生育調査 (昭和59年度)

施肥量	台木別	5月29日（定植27日後）				開花始期 （第10節）	枯死株 （%）
		つる長 （cm）	葉数 （枚）	最大葉（cm）			
				タテ	ヨコ		
7	園研2号	43.3	8.6	10.5	12.2	6月12日	0
	新土佐	49.6	9.4	11.3	13.5	6月11日	50
	金剛	45.4	8.7	10.5	11.9	6月11日	33
	（対照）自根	41.5	9.5	10.0	12.3	6月14日	0
5	園研2号	32.9	7.7	9.3	11.1	6月14日	0
	新土佐	47.3	9.3	8.7	11.2	6月13日	33
	金剛	40.9	9.2	11.2	14.1	6月12日	33
	（対照）自根	31.0	8.2	9.7	12.4	6月15日	0

り、糖度も低く、品質的に著しく劣っていた。

収量と施肥窒素量の関係では、カボチャ台では明確でなかったが、園研2号と自根では7kgが5kgよりまさる傾向がみられた。

園研2号台木に接木した果実品質は外観、糖度とも自根と比較して差がなく、58年度とほぼ同じ結果が得られた。

表4 収量 (個, kg/10a), 品質調査 (昭和59年度)

施肥 量	台 木 別	前期 (~8/7)			中期 (8/8~8/14)			後期 (8/15~8/20)			合 計			品 質 調 査			
		個数 (個)	重量 (kg)	一果重 (g)	個数	重量	一果重	個数	重量	一果重	個数	重量	一果重	果高 (cm)	果径 (cm)	果径 果高	糖度 (Brix)
7	園研2号	139	229	1,650	693	1,143	1,648	970	1,518	1,564	1,802	2,890	1,603	15.3	14.0	0.92	13.2
	新土佐	69	147	2,050	346	527	1,520	138	234	1,685	553	903	1,623	16.5	14.0	0.85	12.8
	金剛	138	305	2,200	347	776	2,238	347	554	1,600	832	1,635	1,966	—	—	—	10.2
	(対照)自根	10	0	—	763	1,034	1,356	970	1,527	1,573	1,733	2,561	1,478	15.0	13.0	0.87	13.5
5	園研2号	0	0	—	692	1,028	1,483	832	1,245	1,497	1,524	2,273	1,490	—	—	—	14.0
	新土佐	208	426	2,050	624	1,064	1,706	0	0	—	832	1,490	1,792	16.5	14.2	0.86	12.7
	金剛	0	0	—	485	745	1,534	208	306	1,470	693	1,051	1,515	15.6	14.8	0.95	12.2
	(対照)自根	0	0	—	762	1,012	1,328	901	1,319	1,462	1,663	2,332	1,402	—	—	—	13.0

4 ま と め

アムスメロンの接木台木を比較したところ、カボチャ台のNo. 8, 金剛, 新土佐1号は収量性、品質とも劣り、不適であった。また、共台のうち健脚は着果が劣って低収であっ

た。園研2号は後期まで草勢がよく維持されており、収量性にもすぐれており、糖度などの品質も自根とほぼ同じであり、アムスメロンの接木台木として適するものと判断された。なお、園研2号を接木に利用した際の施肥量は、自根と同じでよいと考えられる。